

日本の金融自由化を展望する

急いでは事を仕損じるのではないか

ユージン・H・ロットバーグ

日本の金融自由化の遅々とした歩みに対する米国のいら立ちは、昨年の日米円・ドル委員会の合意後のいまも折にふれ顔をのぞかせる。そんな中で知日家のロットバーグ世銀副総裁は、日本の自由化の歩みが西欧諸国などに比べ決して遅すぎるものでないことを評価するばかりか、性急にすぎないことを忠告している。これは同副総裁がことし七月九日ニューヨークの日米協会で行った講演の要旨をまとめたものである。

世界一の自由化速度

日本の金融・資本市場の開放はかなり以前から着実に進められてきた。過去一〇年間では、日本は世界中で一番、金融・資本市場の開放を進めた国といえよう。金融・資本市場の開放日本人の言い方に従えば「金融自由化」の度合いをはかる尺度は五つほどある。

第一は市場へのアクセス。日本は多数の外国政府、国際機関、外国企業に急速に円の利用を認めてきた。これはあまり例がなく、西欧諸国

Eugene H. Rottberg
世界銀行副総裁兼財務局長。世銀の借り入れ、投資、資産管理の責任者。マサマラ前總裁時代に秘書役から財務局長に抜きされた。知日家で日本の金融・証券界にも知人が多い。米ベンシルベニア大学法学部卒。フィラデルフィア出

本ほどは開放していない。

第二の尺度は資本輸出の自由度。この面でも規制を行っている西欧諸国に比べ、日本は自由化が進んでおり、過去一〇～一五年間、ドル、西ドイツ・マルク、イスラエルによる巨額の債券投資、不動産投資が行われた。

第三の尺度は金利の決定。政府の規制によってではなく市場要因によって決定される割合が大きいかどうかという問題である。世界で最も自由化が進んだ米国を含め、各国とも主要な金利は規制や法律で決められている。米国の場合、当座預金には金利の上限が設けられているし、預金通帳貯金口座 (passbook savings accounts) には最高限度額が定められている。また、一九七〇年代半ばまでは、商業銀行の大口CD (譲渡可能定期預金証書) の金利にも上限があつた。また、どの国でも金利水準を維持するため中央銀行による介入が行われている。日本は金利の面で政策当局がきわめて広範な規制を行っていると受けとめられているが、他の先進諸国と格別異なった規制を行